

2016年8月31日

各位

**積水ハウス株式会社**  
**ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン**

**「ダイアログ・イン・ザ・ダーク 対話のある家」、秋の新プログラム  
 <暗闇の中のアート『感じる秋』>9月29日より開催  
 ～デザインプロジェクト「mikketa」と初コラボ、余り糸が紡ぐ暗闇のコミュニケーション～**

積水ハウス株式会社(本社:大阪市北区、社長:阿部 俊則、以下「積水ハウス」)が、情報受発信拠点「SUMUFUMULAB(住ムフムラボ)」(グランフロント大阪・ナレッジキャピタル内)で定期開催しているダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン(本社:東京都渋谷区、代表:志村 真介)との共創プログラム、「ダイアログ・イン・ザ・ダーク(以下、DID)対話のある家」は、9月29日(木)から10月31日(月)まで、秋の新プログラム<暗闇の中のアート『感じる秋』>を開催します。

今回は、三星毛糸株式会社(本社:岐阜県羽島市、代表:岩田 真吾)が創る、生地の製造過程で出る余り糸や布の切れ端などを活かしたデザインプロジェクト『mikketa』との初のコラボプログラムです。実施に先立ち、9月1日(木)正午よりWEBでのチケット先行販売を開始します。

**アートの秋、目に見えない形や温もりを通して「発見と工夫」の面白さを感じる**

秋の新プログラム<暗闇の中のアート『感じる秋』>は、子どもから大人まで楽しんでいただける構成となっています。

五感を研ぎ澄ませて、暗闇で感じるアート。また、色鮮やかな『mikketa』の余り糸を使った遊びや作品づくりを通して、同プロジェクトのコンセプトである「発見と工夫」の面白さを体感していただきます。

一人ひとりが作った作品を集め、本プログラムの終了後に、さらにアート作品として住ムフムラボでお楽しみいただける仕掛けも予定しています。一度は不要になった余り糸が、暗闇の中のコミュニケーションツールとなり、人と人を紡ぎます。



独特の風合いがある、  
『mikketa』の糸

**初の夏休みプログラムで子どもの体験が大幅に増加**

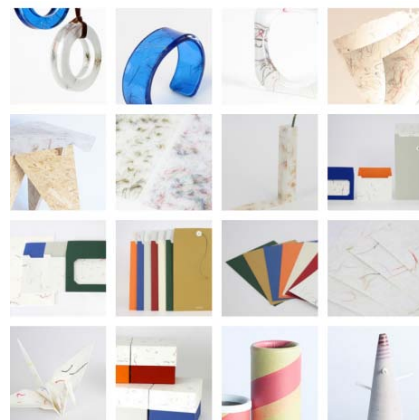
これまで世界39カ国・約130都市で開催され、800万人以上が体験した、暗闇のソーシャルエンターテインメント「ダイアログ・イン・ザ・ダーク(DID)」。視覚を閉じることによって呼び覚ます子どもの感性や能力。そんな気づきや親子のコミュニケーションを生むDIDの世界を、日本でも多くの子どもたちに体験してもらおうと、この夏、「DID 対話のある家」では初の親子向け夏休みプログラムを実施。その結果、大幅に親子の体験が増加し、「普段は叱ることが多いのに、子どもがリードしてくれて頼もしく感じられたのが新鮮だった」といった感想が寄せられました。

## ■「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」対話のある家」開催概要

	第14回プログラム 暗闇の中のアート『感じる秋』
開催場所	グランフロント大阪 北館ナレッジキャピタル4階（大阪市北区大深町3番1号） 積水ハウス「SUMUFUMULAB(住ムフムラボ)」
開催期間	2016年9月29日(木)～10月31日(月)(火曜・水曜定休)
開催時間	午前11時より1日5回
参加料金	大人3,500円／学生2,500円／小学生1,500円（税込）
所要時間	70分
参加人数	各回6人まで
チケット発売	9月1日(木)正午～
申込方法	予約状況確認・申込はWEBで <a href="http://www.sumufumulab.jp/did/">http://www.sumufumulab.jp/did/</a>
問い合わせ	「対話のある家」お問い合わせ事務局： 0120-29-2704(11:00～18:00 ※土日祝日除く)

## ■「mikketa」とは

mikketa(ミッケタ)は、三星毛糸株式会社(mikke)と建築にまつわるプロダクトやデザインを行うグループTAB(ta)が一緒になって創る、余り糸や布の切れ端、糸巻きの芯などを活かしたデザインプロジェクトです。色系のカラフルな風合いを活かしたランプシェードやノートブック、糸巻きの芯をそのまま使ったペンスタンドなど、製造過程の流れの中で見過ごされてきたアレコレをmikke(発見)して、デザインを+α(工夫)することで、日常生活を彩るアレコレに変えていきます。今回は「対話のある家×mikketa」の中で、皆さんにも「発見と工夫」の面白さを共感してもらえたらと考えています。



## ■<暗闇の中のアート『感じる秋』>

一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ 代表理事 志村 季世恵

明かりひとつない真っ暗な中で物を見たり、何かを作ったことはありますか？私たちの五感はとても優れているのです。

目を使わなくても、匂いや音、触感などでそれが何であるのかを察知することができます。感覚は使わなければ退化していきませんが、ほどよく刺激を与えてあげるとみずみずしい感性を取り戻すことができます。

今年の秋は、「対話のある家」の家族になって、暗闇の中、アートを楽しんでみてください。

きっと何か新しい発見があるはず。



## ■1万人が体験した、DIDと積水ハウスの共創プログラム「対話のある家」

積水ハウスは「生涯住宅」思想のもと、長年にわたり「スマートユニバーサルデザイン」などの研究活動を続けてまいりました。その一環として、「感じる力」「関係性の回復」「多様性を認める」を目的に、対話する場を提供し続けるDIDとの共創プログラム「対話のある家」を2013年4月に開設。日常では得られない気づきやコミュニケーション向上の機会を提供し、2016年3月には体験者が1万人を突破しました。ブランドビジョン「SLOW & SMART」を実現する住まいの快適性を深化させる研究にも活かしてまいります。



見て触れて楽しめる「DID 対話のある家」の展示コーナー

## ■これまでの開催実績

- 開催日数: 2013年4月26日から開始、開催日数は計544日間(2016年7月31日現在)
- 参加者数: 約11,225人／性別: 男性38%、女性62%
- 年代: 10代以下8%、20代29%、30代27%、40代21%、50代11%、60代以上4%
- クリスマス、お正月など、季節ごとに毎回異なるプログラムを開催、体験するたびに新しい発見が得られるとの声も多数いただいております。

## ■これまでの体験者の声

- どきどきしたけど楽しくなって自分があかるくなりました。(8歳 男の子)
- 楽しかったです。目のことをわすれていた。(8歳 男の子)
- 家の中は安全、安心というイメージでしたが、暗闇になるだけで不安になり、普段の生活で視覚に頼りきっていることを知りました。今回、目以外の何かで物を見るということの意味を、少しだけですが触れることが出来たと思います。(24歳 男性)
- 新鮮な体験でした。一番の発見は「見えなくても楽しい」ことが分かったことです。見えることで奪われてしまっていることに「楽しさ」があったんですね。それを忘れそうになった頃にまた来たいです。(48歳 男性)
- 一緒に参加した人は、ほとんどが初対面だったけど、すごく仲良くなれた気がします。周りの人たちのありがたみに改めて気付いた70分間でした。(23歳 女性)
- 光があるところ比べて、ふくよかな柔らかい空間を感じた。人との距離も近く感じた。(36歳 男性)
- 暗いと自分が解放される感じがしました。自分を枠にはめず、自由になった気がしました。皆さんも温かくて、とても良い時間をいただきました。(43歳 女性)
- 普段何気なくつないでいる子どもの手だけど、実は自分が安心させてもらっていたんだと気が付きました。これからは目で見て気が付いたものをしっかりと声で、表情で伝えたいです。(37歳 女性)